

# 漫画家 若木民喜 さん



## Profile

若木民喜（わかき たみき）  
京都大学文学部に入学。大学2回生のときに小学館新人コミック大賞に入選。その後初連載『聖結晶アルパトロス』まで10年以上を要したという珍しい経歴を持つ。2008年には『神のみぞ知るセカイ』の連載を開始。2010年には同作品はテレビアニメ化もされ、大人気となった。最新作『ねじの人々』は大学時代に専攻していた哲学を題材にした漫画である。



▲有名なセリフをもじった「感じるな、考えろ!」という若木さんからのメッセージ

## ～大学生活～

— どうして京大文学部を志望されたのですか。 —

文学部というよりは京大に入りたいというのがまずありましたね。大学に入らないといけないなって考える中で、授業を聞くとか人の話を長い間聞き続けるっていうのが嫌だったので、自由にやっていいよという空気を醸し出していた京大に入ろうと思ったんです。とにかく勉強したくなかったんですよ。勉強したくないから京大を目指すっていうのも変な話ですけど(笑)。

当時の僕はやりたいことはなかったけどやりたくないことはたくさんあったっていう典型的な厨二病だったんですよ。とりえずサラリーマンになりたいっていう気持ちはあったんで、自分の学力を踏まえて、中でも将来の選択肢の多い文学部を選びました。

— その後は哲学科(現、哲学基礎文化学系)に進まれたそうですね。 —

専攻を決めるときに美学をやりたいと思ったんですよ。京大は美学と美術史学の専攻が哲学科の下に置かれていて、美学史を単なる歴史じゃなく、美しいものを追い求める人間の活動として別枠にす

る感じが好きだったんです。もともと絵を見るのはとても好きで、美術は好きだったんですけど、正直哲学はそんなに好きじゃなかったんですよ。なんでこの絵が素晴らしいんだろう、なんでこんな絵があるんだろうということに興味があって美学をやりたいかったんで、結果として哲学科に進んだという感じですね。

— 大学で過ごしていて思い出に残っていることは何ですか。 —

1回生の時しか関わりがなかったけどクラスの友達ですね。高校の頃まで厨二病全開だったから自分が世界で一番偉大な人間だと思っていました。けれど大学に入ったら自分よりすごいやつが山ほどいたんですよ。頭が良いってだけじゃなくて自己表現がすごくうまくて、考えていることを表現するのが達者だったんですよ。例えばタバコのポイ捨てを注意したらそれを正当化する理由を100個くらい羅列してくるみたいに。人間のクズだとは思わんけど、こんなに非生産的な方向に全力を注ぐ「いいダメ人間」だまって(笑)。高校の時はここまで面白いやつはそんなにいなかったし、その分思い出に残っていますね。



## ～漫画家として～



— 2回生の頃に小学館新人コミック大賞に入選したときから漫画家になろうと思っていたのですか。 —

高校生くらいから漫画家になりたいという気持ちはおぼろげにありました。大学に入ってからは毎日授業に行くことがなくなった分暇な時間が増えて、その時にチャンスが訪れたというかね。大学2回生のときに突如漫画を描こうとして、締切に間に合わないまま途中で出したら未完成なのに入選したんですよ。賞がもらえるなんて思ってなかったから、僕は受賞の時に旅行に行っていましたね。旅行の途中で僕1人だけ小学館に挨拶しに行っ。その時は天狗になりましたよね。僕って天才なんじゃないかって。

でも漫画家になりたいという漠然とした気持ちしかなかった段階で担当がついて、漫画家としてやっていく覚悟や心の準備が全然できていなかったんです。プロになるっていう現実感がないまま漫画を描くことになって、漫画家としてのこれからを考えずにいた結果、十数年間くすぶっちゃうことになったわけです。

— 受賞から初連載までの十数年間はどのような生活だったのですか。 —

当時の僕は真剣に考えてなかったんですよ。いきなり受賞となると自分にすごい才能があるんじゃないかと思うじゃないですか。だから1回けなされただけで心が折れるんですよ。今まで評価されたこともないから、プロの編集者からつまらないねって言われたら二の句が継げないんですよ。それから自信だけがなくなってって、かといって自分が天才だという幻想はすぐには捨てられなくて。そこで自分の実力を確かめるなりすればよかったんですけど、僕がしたのはただ寝ることだけでした。そうして気がつけば誰の注意も受けないまま26歳くらいになってたんですよ(笑)。そのまま5年くらいゴロゴロして30歳を過ぎるまで21歳の栄光を引きずっていました。

— その後『神のみぞ知るセカイ』が大人気になりましたが、描こうと思った理由は何ですか。 —

もともとこういうふう描こうと思っていたわけではないんですけど、京大で学んでいるうちにできあがったフィルターを通すところこういう恋愛ものになっちゃったって感じですね。なんでも理屈っぽく考えるっていうのはクラスメートをはじめとした環境の影響だと思うんですよ。卒業してからだいぶ経っていますが僕に与えた影響は限りなく大きいですね。『神のみぞ知るセカイ』っていうのはなりたい理想の自分と現実世界の自分の差を描いたものだったんですよ。理想の自分になれないというギャップが登場人物の心のスキマとして現れているっていう話なんですけど、それはそのまま自分の話だったんですよ。

— では主人公の桂馬にも京大生らしさが表れているのでしょうか。 —

ゼロではないと思いますね。僕は恋愛ものは大好きなんですけど、ご都合主義をどうしても許せない部分があって。でも漫画としては必要じゃないですか。そのジレンマの中で心の葛藤なく作品を描くために生まれたのが桂馬ですね。桂馬は自分自身さえも自分の計画の中に入れ込めるのがすごいと思います。我ながらこいつはなかなかやるなと感心しています。

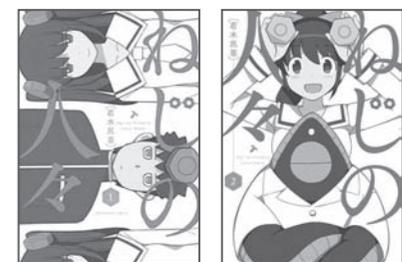
— 今連載している『ねじの人々』はどのように出来上がったのですか。 —

『神のみぞ知るセカイ』では、なぜ人間に心のスキマができてしまうのかということを描こう、というあたりで物語が佳境に入ってしまったので、そのことだけを専用の枠でやりたいと思って描き始めました。これが哲学というものを改めて考える機会になったというか。そもそもなんで哲学ってこんなに難しいんだろうっていうのがありましたね。ただ最初の動機は哲学をわかりやすく伝えようと

思ったことだったんですけど、『ねじの人々』を描いてみて簡潔に表すのは無理だなって思いました。

— 漫画を描いていて意識していることはありますか。 —

『ねじの人々』の中でも描いているんですけど、「答え」を出すことに対する不安があるんですよ。漫画っていうのはエンドがないとだめで、エンドっていうのは「答え」の1つなんで。「答えがない」っていうのは「答え」として扱われないというのが常に付きまっていますね。そういう「答え」っていうものを疑っていくのが哲学なのに1つの「答え」を用意することを求められているんですよ。「答え」っていうのはある種の思考停止だからそこで終わりということじゃないですか。「答え」は必要だけどこの「答え」で本当に終わってしまっているのかという部分まで考えているかどうかというところに最近ではジレンマを感じています。



▲『ねじの人々』1、2巻の表紙

— 最後に京大生へメッセージをお願いします。 —

僕から言えることなんて何もありませんけど、大学時代は何をしても後々役に立つことが多いですよ。僕も実際大学には全然行ってなかったんですけど、京大生らしさは抜けきらずにこうして役に立っていると思うので。だから居るだけ、授業を受けるだけでいいんじゃないですか。僕がやっていないことを人に言うのもなんですけどね(笑)。

— ありがとうございます。 —

はみだし  
すてーじ

つこの間、大学の近くに引っ越しました。1限の遅刻が増……いや、何でもないですww (医・2 休眠)  
⇒寒い冬となると布団から出るのも大変ですもんね……。 (この前起きたら13時過ぎて思考停止した；編)

はみだし  
すてーじ

クロス解いててテスト範囲聞き逃した…… (工・3 道路構造令)  
⇒どんな時でもらいつてーじを読んでいただいて感謝感謝です。 (でもクロスワードの答えはテストに出ないんですよ……；編)